

人生100年時代、介護問題を女性の目で見ると

提言

食・職・触

“新しい地域づくり”は3しょく付きで！

登壇者

樋口 恵子氏
猪熊 律子氏(特非) 高齢社会をよくする女性の会理事長
読売新聞東京本社編集委員

■ 寄せられた声から

- どんな時でも自分らしく生きていく決意を新たにしました。人のためでもあるが自分のための方が強いです。
- とても役に立ちました。本当に素晴らしい時間でした。最後の長寿の2つの条件、戦争がないこと（平和）（豊かさ）を大事にして次に伝えようには涙が出ました。ありがとうございました。
- 素晴らしい！ 夢をいっぱいいただきました。

■ 議事要旨 樋口 恵子氏

猪熊律子さん（読売新聞社会保障担当編集委員）とパネリスト2人だけのため、標題に基づいてそれぞれの専門分野の講演2本立て、司会役を猪熊さんをお願いする、という構成で進行しました。

前半は女性と女性の老いをめぐる膨大なパワポ資料とともに猪熊さんの解説。同じ老いといっても、性別役割分業意識の強い日本社会の老いは、はっきり男性と女性に塗り分けられていること、女性は平均寿命が長いので、経済的（年金など）には男性より厳しい条件にあることが、データと共に語られました。

極め付きは、終わりの段階で示された女性刑務所で取材された現状です。最近の日本では刑務所に収監される受刑者の数は減少しているというのに、65歳以上女性だけは増えているとか。万引きなどを繰り返す人も多いらしく、この事実のかけには、老いて経済的に立ち行かず、支えてくれる人もいない老女たちが、刑務所志願のために微罪を重ねる——そんな姿が目につかぶような気がしました。もし、一定の年金など手にすることができたら、この人たちは福祉住宅などでつつましく暮らし、法を犯すことなどない一生を送ることができたのではないかと、思った次第です。

私は、現在の日本の高齢女性の一部をあえてBB（貧乏ばあさん）と名付け、女性が老いて貧困に陥りやすい現状を高齢者の立場からお話しました。今、介護保険制度で担われている在宅介護も、それ以前は主として嫁に

よって担われていました。今回若干の改善が行われましたが、そもそも嫁には相続権もないのです。年間10万人にのぼる介護離職者のうち76%は女性です。無償の在宅介護は、今も女性の肩に多く担われていることを忘れてはならないと思います。「人は女に生まれません。女になるのだ」は、かのポーヴォワールのことばですが、私はその大先輩のひそみに倣い「女は貧乏に生まれません。女の一生を生きて貧乏に落ち込むのだ」と言いたいと思います。女性の権利のためにだけ言うものではありません。高齢者の6割、後期高齢者の7割を占める女性高齢者が貧しく不健康だったら、日本の屋台骨が揺らぎかねません。高齢女性の健康と幸福は社会の資源です。

今回男性の参加も多かったから、というわけではないのですが、近頃私が注目する男性の変化について言及しました。男性の平均寿命がこのところじりじりと伸び続け、女性との差を縮めつつあります。この10年ほど注目されるようになった健康寿命と平均寿命の差は、男性9年、女性12年！ この30年ほどの間に、男たちは家事介護をしないと女たちに責められたり、40歳以下では家庭科が必修になる（1993年より中学校にて、家庭科の男女必修実施）など、制度や環境の変化に対応した行動変容があったからだと評価しています。

この男性たちとともに地域の創造を。3しょく付きのコミュニティへ——で分科会を締めくくりました。

アンケートの結果 参加者概数：117名 回答者数：90名

